

令和 6 年 度
宮崎国際大学 国際教養学部
一般推薦Ⅱ期

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

問題

次の文章は、劇作家である平田オリザさんが、日本とヨーロッパの社会や文化の違いについて述べたものです。平田さんの意見を要約し、それを踏まえた上で、あなたはグローバル社会の中で、世界の人々とどのようにコミュニケーションをとりたいと考えるか、600字以内で述べなさい。

日本語は、日本国内だけで使われ発達してきた言語です。日本は島国ですから、国境線と言語の境界線がほぼ重なっている。こういった国家や言語は実は珍しいのですが、日本人はそれを当たり前と考え、あまり意識していません。それだけではなく、人口や職業の流動も少なく、限られた土地で暮らしていると、同じ生活習慣、同じ価値観を持つ共同体が生まれます。そのなかにいる限り、言葉で多くを説明しなくても互いに理解しあえます。

言語学では、このような社会を「ハイコンテキスト」な社会といいます。コンテキストというのは、直訳すれば「文脈」ですが、ここではその言語が使われるコミュニケーションの基盤、文化的な背景のことです。日本は世界の中でもとりわけハイコンテキストな社会です。

一方、ヨーロッパは異なる価値観、異なる文化的背景、異なる宗教を持つ人たちが陸続きの国で暮らしてきました。人と出会ったときには、相手が敵か味方かわかりません。どのような文化で育った人かもわからない。自分が何者で、何を愛し、何を憎み、どんな能力で社会に貢献できるかを明確に相手に説明し、伝える必要がありました。自分のことを詳細に説明しなければ、相手にわかってもらうことができません。共通する価値観や生活習慣、文化などがあまりない、こうした文化を「ローコンテキスト」な社会といいます。

私は日本文化を「わかりあう文化」「察しあう文化」、ヨーロッパ文化を「説明しあう文化」とも呼んできました。

これは大雑把な分類で、もちろん例外もたくさんあります。また、どちらが良くてどちらが悪いという話でもありません。日本では、わかりあい、察しあう文化の中から素晴らしい芸術を生み出してきた。俳句や短歌などがその顕著な例です。正岡子規（一八六七～一九〇二）のこの句を見てあなたは何を思うでしょうか。

柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺

日本人の多くは、このたった十七音だけで、奈良・斑鳩^{いかるが}の里の寂しげな風景を思い浮かべることができます。

世界に目を向けてみると、日本ほどの大きな国家で、ここまでハイコンテキストな社会はほとんどなく、多くの社会では相手がわかるようにていねいに言葉で説明する必要があります。そこに良し悪しはありませんが、「日本のようなハイコンテキストな社会は少数派だ」

と認識しておく必要があります。

ただ、少数派だからといって卑屈になる必要もありません。たとえば芸術の世界では少数派のほうが有利になる場合もあります。

私が世界中の劇場からオファーをいただいていたのは、私が世界的に見れば少数派に属するハイコンテクストな日本社会の文化を背負い、日常的に使っている日本語の特徴を活かして戯曲を書いているからです。そして、それを相手にわかるように、相手の文脈に翻訳して説明できるからです。決して自分の文化を卑下したり、相手の文化に合わせてりする必要はありません。ただ、相手の文脈で説明する能力は必要だということです。

(平田オリザ「ともに生きるための演劇」による)